「この」と「その」の文脈指示用法再考

庵　功雄

要旨

文脈指示における「この」と「その」の違いについては拙論をはじめいくつかの説が出されているが、用語の混乱などから必ずしも議論が噛み合っていないところがある。本稿では、最新の先行研究を検討した後、新聞の語彙調査の結果を踏まえて、「この」と「その」の機能の違いについて改めて考えた。

キーワード　文脈指示、「この」と「その」、指定指示、代行指示、定冠詞

0．はじめに

指示詞の文脈指示用法に関してはこれまで多くの議論があり、論者もいくつか拙論を公にしてきた（庵(1994,1995a,1996a,1996b,1997a)）。これらを通して、一定の合意形成がなされていると言える部分もあるが、用語の問題などで必ずしも議論が噛み合っていない点も見られる。本稿では新たに行った定量的な調査結果を加えて、「この」と「その」の文脈指示用法について改めて考えてみたい。

1．これまでの議論

論者は修士論文（庵(1993)[1]）以来、「この」と「その」の文脈指示用法を中心に研究を進めてきた。そこでの議論をまとめると次のようになる。

(1)a.「この／その」には指定指示用法と代行指示用法がある[2]。

b. 指定指示を扱うには Halliday & Hasan(1976)の「指示(reference)」という考え方が、代行指示（特に単一テンス内の照応の場合）を扱うには「代用(substitution)」という考え方が役に立つ[3]。

---

[1] この論文は未公刊だが、必要に応じて引用する。同論文は、原論文の形式では読みにくいため、巻末の注を脚注にするなどして次の URL で公開した（http://cse.hit-u.ac.jp/staff/iori/ronbun_iori/syuron.pdf）。引用する際はこの Web 版のページを用いる。

[2] 指定指示とは、（ア）のように、「この／その＋ＮＰ」全体で先行詞と照応するものであり、代行指示とは、（イ）のように、「こ／そ」の部分だけが先行詞と照応するものである。

（ア）　昨日、久しぶりにぜんざいを食べたんだけど、この／そのぜんざいはなかなかうまかったよ。

（イ）　昨日、久しぶりにぜんざいを食べたんだけど、この／その味がなかなかよかったんだよ。

[3] 庵(1995a:96ff.)などで論じたように、「代用」と「代行指示」は独立の概念である。つまり、「代行指示」であっても「この／その（厳密には「こ／そ」の部分）」が「代用」ではないことはあり得る。例えば、次例の「この結果」（の「こ」）は代行指示であるが、この部分は、「……伝えたこと」＞「このこと（の結果）」＞「これ（の結果）」＞「こ（の結果）」とい

c. 代行指示が可能なのは名詞が統語的に項を持った１項名詞の場合に限られる。

d. 指定指示の場合、「この」はテキスト送信者（書き手・話し手）が先行詞をトピックとの関連性という観点から捉えていることを示すマーカーであり、「その」は先行詞へのテキスト的意味の付与という観点から捉えていることを示すマーカーである。

他にもいくつかあるが、本稿との関連という点から以上に絞ることにする。本稿ではまず、「この」と「その」の使い分けに関する論者の説に対する有力な批判である堤(1998)、及び、指示詞の文脈指示用法に関する最新の研究である金水(1999)を検討した後、今回新たに行った定量調査の結果を踏まえて、論者の考えを改めて述べることにしたい。

２．先行研究

ここでは本稿に関連する先行研究として、堤(1998)と金水(1999)を検討する。

堤(1998)は「この」と「その」の使い分けを形式意味論の立場から論じたもので興味深い。特に、(2)のような例において「その」が使える理由についての議論は説得的である。

(2) 昔むかし、あるところにおじいさんが住んでいました。（その／この）おじいさんは、山へしばかりに行きました。（堤(1998:43)）

堤(1998)は「この」と「その」の違いを、「このN／そのN」が「話者にとって指示的」であるか否かという点に求めている。この「話者にとって指示的」か否かという区別はほぼ特定的（specific）／非特定的（non-specific）という区別に対応するように思われる。そして、そうした観点の議論が妥当性を持つ場合があるのも事実である。

ただし、堤(1998)の議論に疑問の余地がないわけではない。その最大のものは、「先行詞が固有名詞の場合には「この」が使用され、「その」は使用できない」（堤(1998:48)）という部分である。

庵(1996b, 1997a)などで述べたように、先行文（連続）とその文との意味的関係が対比的または逆接的なときには「その」の使用が義務的になることがある。

(3) 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。（その／#この／#φ）順子が今は他の男の子供を２人も産んでいる。（庵(1996b:32)）[4]

う派生でできている点で「指示」に属する。一般に、代行指示が全て代用になるのは同一テンス内での照応の場合に限られる（cf. 庵(1995a:96)）。

（ウ）自民、民主、公明３党の衆院日米防衛指針特別委員会理事は２４日夜、東京都内のホテルで協議し、自民党が２３日の自自合意内容を説明し、「民主、公明党の協力を得て成立させたい」と伝えた。この結果、自自合意にある「後方支援活動での武器使用を認める」などは了承したが、民主、公明両党は、自自合意により、船舶検査実施の要件から「国連安保理決議」が削除されたことに反発し、決議復活を要求。（毎日新聞朝刊 1999.4.25）

[4] 本稿でも、これまでの拙論と同じく、連文的なつながりの悪さ（非結束性 incohesiveness）を表すのには # を、統語的な不適格さ（非文法性）を表すには * を用いる。

こうした場合には先行詞が固有名詞であることが多い。今回の調査例から実例を挙げると次のようなものがある。

(4) 最盛期の 1970 年ごろ、町内には 12 社の鋳物工場があった。今では永瀬さんの工場を含めて2社だけ。その永瀬さんも、町外への移転を決めている。「半導体製造装置の部品づくりに力を入れていますが、イメージは昔のまま。しかたないね」と、あきらめ顔だ。（毎日新聞朝刊 1999.5.17）

こうした例はかなり一般的に存在する。これが庵(1997a)の執筆動機の一つでもある。この(4)などは堤(1998)の一般化に対する体系的な反例になるのではないかと思われる。

しかし、堤(1998)が上述のような一般化を目指した理由にも理解できるところがある。確かに、(2)や(5)では「この」も「その」も使えるのである。

(5) 昨日生協でぜんざいを食べた。（この／その／φ）ぜんざいはうまかった。

（庵(1996b:74)）

しかし、これは決して一般的な現象ではない。次例を見て頂きたい。

(6) 携帯電話「Ｊ－ＰＨＯＮＥ」利用者の個人情報が流出した問題で、「Ｊ－フォン東京」（旧東京デジタルホン、林義郎社長、本社・東京都新宿区）は 24 日、販売代理店「光通信」（本社・千代田区）の男性社員（26）が漏らしたと発表した。光通信に対しては来年１月１～15 日、携帯電話機と付属品の出荷停止措置を取る。光通信は 11 月 14 日付でこの社員を懲戒解雇している。

Ｊ－フォン東京によると、この社員は光通信から顧客情報入力業務を委託している「グッドウィル・コミュニケーション」に出向していた７月初めごろ、同社の端末から顧客 146 人分の住所、氏名、性別、電話番号などの情報を引き出し、プリントアウトして持ち出した。

Ｊ－フォン東京は漏えいが明らかになった同月下旬から、社内や代理店などを調査。情報の書式などの特徴から、代理店から流出した可能性が高いことが判明した。これを受けて光通信が社内調査を実施したところ 11 月になって、この社員が漏らしたと分かった。（毎日新聞朝刊 1999.12.25）

(7) ニューヨーク銀は、疑惑の舞台となったロンドン支店の東欧担当幹部を内規違反などで 30 日までに解雇した。この幹部の夫がロシア移民で、ロシア・マフィアの大物のモギレビッチ氏につながると言われている。（毎日新聞朝刊 1999.9.2）

(6)では計３回「この社員」が使われているが、論者の語感では全ての例において「この」は「その」に置き換えにくい。(7)も同様である。少なくとも、新聞などでのこれに類した例ではほとんど全ての場合に「この」が使われている。

実は、(2)や(5)と(6)(7)の違いを一般化することが「この」と「その」の使い分けの記述の中で最も難しいのであるが、論者は、(2)や(5)のタイプが特殊であり、(6)(7)のタイプが一般的であると考えている。確かに、(6)(7)のタイプにおける先行詞は「話し手にとって指

示的」であるというのは正しいかもしれない。しかし、(6)の先行詞が(8)のように定式化されることも可能であるはずである。そうすると、(6)(7)のタイプの例は堤(1998)の予測と合わないことになる[5]。

(8) その x［x is 社員］（cf. 堤(1998:50)）

あるいは、(6)(7)のタイプでは先行詞は「話し手にとって指示的」でしかあり得ないのかもしれない。しかし、そうだとすると、書きことばにおいては書き手は基本的に全てのことを知っているのだから、全ての対象は「話し手にとって指示的」であるということになってしまい、堤(1998)の枠組みがあまり効力を持たないことになるのではなかろうか。

こうした問題が起こるのは、堤(1998)がテキストタイプの問題を考慮していないためではないかと思われる。堤(1998)が対象としているのは、文脈指示の中でも聞き手が存在するケースが中心である。典型的なのは(9)のような疑問文に関する場合であるが、それ以外にも知識の披瀝（cf. 田野村(1990)）を表す「のだ」が付いた文などが多い。

(9) 僕が好きな国を当ててごらん？（その／??この）国は南アメリカにあって、コーヒーがとても有名なんだ。（堤(1998:44)）

こうした例は話しことばである点からもわかるように聞き手が存在する場合である。庵(1994)でも述べたように、聞き手が存在する場合は金水・田窪(1990, 1992)のような知識管理的なアプローチが有効なことが多い。これについては庵(1993:53ff.)も参照されたい[6]。

このように、堤(1998)には論者の立場からして必ずしも首肯できない部分もあるが、論者の議論で説明が難しい用例に対する説明として説得的な部分も多い。

次に、金水(1999)を取り上げる。この論文は指示詞の現場指示用法と文脈指示用法との統一的説明を目指したものである。ここでは、コ系統とア系統の文脈指示用法は現場指示用法の拡張であり、両者は本質的には同一のものであるとされている。論者もア系統については同様の見解を持っている（庵(1995b:620)）。コ系統についてもデータの解釈として

---

[5] もちろん、ここでは(6)(7)のタイプでは「その」が使いにくいという文法性判断を前提としている。

[6] なお、堤(1998)には拙論の用語に関する誤解がある。具体的には、「代行指示」と「代用」に関する部分である。堤(1998:52)は、庵(1997b)が「代行指示」と「代用」を同一視していると述べているが、これは事実に反する。本稿の注2や庵(1996:80ff, 1997b:100ff.)などで述べているように、「代行指示」と「代用」とは別の概念である。これと同じく、「指定指示」と「指示」も別の概念である。

堤(1998:52)は、庵(1997b)が（エ）の「この」が強い非文法性を示すと考えていると述べているが、これは上述の用語の誤解に由来する誤解である。

（エ）昨日モスバーガーでシェイクを飲んだが、（その／*この）味は良かった。

庵(1997b)（及びその基になっている庵(1995a)）において、「この」が使えないとした代行指示の例は（オ）のような単一テンス内の照応の例である（実際、庵(1995a:85)は（エ）と同様の例で「この」が使えるとしている）。

（オ）*先日、先生が学会の会場でこの著書に目を通しておられた。（現場指示の解釈を除く）

は金水(1999)の見方は正しい。この見方は金水・田窪(1990,1992)の議論を発展させたものだが、ある意味ではこの考え方は直感にも合っており妥当である。ただし、（少なくとも論者は）こうした考え方のみが「説明」であるとは考えない。論者にとっての「説明」とは、産出が可能な規則集のことである。(1)d に挙げた「トピックとの関連性」「テキスト的意味の付与」といった概念は規則の操作性を高めるための試みであるとも言える[7]。

このような立場の違いはあるものの、論者自身、金水(1999)の分析には基本的に賛成するものである[8]。

3．調査とその結果

2では拙論に関する言及のある先行研究について検討した。本節では定量的な調査の結果を踏まえて、「この」と「その」の分布の違いの実態を見ることにする[9]。

3－1．調査の概要

今回の調査は日外アソシエーツ社のＣＤ－ＲＯＭ版「毎日新聞 1999」を用いて行った。調査の方法は1999年の1月から12月の各月から各1日を乱数を用いたランダムサンプリングによって選択し、その日の朝刊の全データ（ただし、東京版のみ）を対象に、「この」と「その」の文脈指示用法の用例を全て取り出すというものである（以下、用例は全て1999年の毎日新聞朝刊からのものであるので、用例には日付のみを記す）。今回は文脈指示用法を扱ったので、次のような現場指示の例は考察対象から外した。

(10) 確かに総合商社はこの１、２年で大きな転換期に来ている。リスクをとるのが総合商社の「売り」だったが、最近は商社もバランスシートが重視され始めた。(4.25)

また、次のような先行詞を持たないものも考察対象から外した。

---

[7] 金水(1999)のような説明は母語話者を対象とする場合には十分有効である。しかし、日本語教育という観点から見た場合はこうした「意味論的」な説明の他に、「トピックとの関連性」「テキスト的意味の付与」といった「使い方の手引き」のような記述が必要である。本稿でこの後行う定量的な分析もそうした「手引き」の内包を豊かにするための試みである。こうした、母語話者に対する説明と非母語話者に対する説明の違いに関しては白川(2002)、庵(2002)を参照されたい。

[8] あえて異を唱えるとすれば、代行指示の分析において名詞の性質が考慮されていない点である。庵(1995a)で述べたように、単一テンス内の代行指示の可否は名詞の性質に依存している。

（カ）a. 先日、先生が学会の会場でその著書に目を通しておられた。

b. *先日、先生が学会の会場でその本に目を通しておられた。（他の解釈では ok）

（カ）a の「その著書」は先生の著書を意味できるが、b の「その本」はその解釈を持たない。これは「著書」と「本」という名詞の性質の違い（前者のみが統語的に項を持つ）に由来する現象である（cf. 庵(1995a)）。ちなみに、金水(1999)では、指定指示の「その」と代行指示の「その」の区別は不要とされている（金水(1999:81)）が、（カ）a, b の文法性の違いから論者はこの区別は必要であると考える。

[9] このように実例の分布の分析から文脈指示の問題を考えたものに三枝(1998)がある。

(11) 使う目的がずっと先にある資金なら、一定期間換金できない単位型（ユニット型）投信でもいいだろう。いつでも引き出せる状態を望むなら、ＭＭＦ（マネー・マネジメント・ファンド）や中期国債ファンドのような公社債投信の追加型（オープン型）が向いている。目的により、その人に適した投信が決まってくるわけだ。（8.2）

以上のような手続きの下に用例を集計した。その結果を次に見ていくことにする。

３－２．調査の結果とその分析

最初に全体的な分布を示す。

(12)

	指定指示	代行指示	合計
この	326	128	454
その	174	512	686
合計	500	640	1140

$\chi 2=239.3$（自由度１）
（99.9％水準で有意）

(12)から明らかなように、「この」の中心的な用法は指定指示であり、「その」のそれは代行指示である。

３－２－１．指定指示の場合

次に、指定指示について考える。先行詞の性質に注目して分類すると次のようになる。

(13)

	普通名詞	固有名詞	文	合計
この	217	55	54	326
その	140	22	12	174
合計	357	77	66	500

$\chi 2=13.41$
（自由度２）
（99.5％水準で有意）

ここで、先行詞が文というのは次のような場合である。この場合、「この傾向」は破線部の文連続を受けていると考えられる。

(14) 日本企業が関連するＭ＆Ａ（企業の合併・買収）は１９８０年代から９０年代初頭にかけてのバブル経済時代に最高潮を迎えた。大和証券の調べによると１９９０年には７８４件のＭ＆Ａがあり、松下電器産業によるＭＣＡの買収など日本企業が海外企業を買収する例が全体の５９％を占めた。

しかし、バブル経済の崩壊でこの傾向は止まり、９３年にはＭ＆Ａの件数が全体でも４０５件（大和証券調べ）まで落ち込んだ。（3.10）

次に、先行詞をそのまま受けるか言い換えるかという点について見てみよう。

(15) 指定指示全体

	言い換えあり	言い換えなし	合計
この	128	198	326
その	19	155	174
合計	147	353	500

$\chi 2=43.91$（自由度1）
(99.9%水準で有意)

(15)から、言い換えが可能なのは基本的には「この」であることが確認できる。このことは先行詞が固有名詞の場合に限っても言える。

(16) 先行詞が固有名詞の場合

	言い換えあり	言い換えなし	合計
この	44	11	55
その	2	20	22
合計	46	31	77

$\chi 2=32.85$（自由度1）
(99.9%水準で有意)

(13)からわかるように、固有名詞と結びつきやすいのは「この」である。しかし、(16)から、「この」の場合は先行詞をそのまま受けるのではなく、言い換えた形で受けることも多いことがわかる。一方、「その」の場合は先行詞をそのまま受けることになる。

この違いは、「この」と「その」の機能の違いに求められる。つまり、「この」は基本的に先行詞との同定のために使われるのに対し、「その」は属性の運び役をして使われるのである（この点を庵(1993)では、「この」は「同定詞」であるのに対し、「その」は「持ち込み詞」であるという形で述べている）[10]。

以上のことからわかるのは、「このN」にはNがトピックと関連を持っているということを示す用法（cf. (6)(7)）があるとともに、「この」自体が先行詞に対する属性付与の手段として使われることがあるということである。

(17) 日比谷公園を見下ろす東京・内幸町の日本長期信用銀行本店ビル。1993年12月13日夕、1階ホールに「ハレルヤ」の大合唱が響いた。創業41年目。大手町の旧本店ビルからの移転を記念した長銀音楽部によるコンサートだった。オーケストラ演奏に行員やグループ企業の社員、家族ら約300人が聴き入った。誰（だれ）もが「長銀新時代」の始まりを予感した。

この20階建てビルは、86年に計画準備が始まり、完成時、増沢高雄会長（68）

[10] こうした特徴付けはやや異なる形ながら堤(1998)でも行われている。しかし、前述のように、堤(1998)は先行詞が不定の場合のみを考察対象としているため、その一般化は部分的に不適切なものとなっている。

が建設準備チームのトップを務めた。総工費約 700 億円は、大手町の旧本店ビルを関連ノンバンク「日本ランディック」の子会社に 1020 億円で売却した利益を充てた。（5.17）

例えば、(17)は「日本長期信用銀行本店ビル」が「20 階建て」という属性を持っていることを付加的に読者に知らせるために使われている。金水(1999)でも指摘されているように、こうした属性は言語的文脈内には存在しないものであるため、テキスト解読者にとっては解読に負担がかかる。コ系統においてこうした負担のかかる情報操作が可能であるのは、コ系統で指される指示対象はトピックとの関連性を持ったものであり、いわば外延的に（金水(1999)の言い方で言えば、眼前にあるもののように）指されているためである。

これに対し、「その」では次のように（固有）名詞が繰り返されることになる。

(18) 小沢氏にはこの５年間、自民党政治に不満を持つ国民に、自民党政権打倒を呼び掛け、新生党や新進党に投票を、と訴えてきた責任がある。その小沢氏が、なぜ今、自民党と手を組む選択をしたのか。これまでの考えはいつ、どういう理由で変わったのか。小沢氏が率いてきた政党にこれまで１票を投じた有権者に、どうしても説明が必要なのである。（1.15）

この場合、「その」は「この５年間、自民党政治に不満を持つ国民に、自民党政権打倒を呼び掛け、新生党や新進党に投票を、と訴えてきた責任がある」という属性（テキスト的意味）を表しているが、この属性はテキスト内にしか存在しないものである。つまり、「その」の場合の指示のあり方は内包的なのである。

「その」が内包的な指示をするということのテキストレベルでの効果の一つは、(19)のような逆接的な意味関係を表すことである（cf. 庵(1996a, 1997a)）。

(19) オランウータンは、インドネシアとマレーシアの熱帯雨林に１～３万頭が生息しているとみられているが、開発ブームで絶滅にひんしており、動物保護に関する国際条約ワシントン条約で取引が禁止されている。

そのオランウータンが、大阪市内の動物業者によって１２匹が密輸入され、うち半数が死んでいたことなどが分かった。そこで動物保護団体などが危機感をつのらせ、７月には「絶滅にひんする野生動物の違法取引・販売・飼育の根絶」などを訴えるアピールを出した。（9.2）

もう一つは次の(20)のような「しりとり的連鎖」とでも言うべきものである。

(20) 「言志録」は江戸後期の儒者、佐藤一斎の著作である。学問と精神修養、哲学思索や人生論を述べた随想録。西郷隆盛が座右の銘としていたことは有名だ。その西郷に私淑するところのあった著者［山田準氏］が、特に１５条を抽出して本書にまとめた。（3.10）

この例では、「佐藤一斎」→「西郷隆盛」→「著者」と話題が展開して行っており、それぞれをつなぐ「のりしろ」として「その」が使われている。もう１例追加しておく。

(21) 国会では辻元清美さんが鈴木宗男さんを「疑惑の総合商社」と詰め寄った。その辻元さんが一転して議員辞職へ。（天声人語 2002.3.30）

「この」と「その」の特徴がこのように捉えられるとすると、「この」の特徴は英語などの定冠詞に近いということが言えるのではないかと思えてくる。定冠詞の機能は先行詞との同定を表すことにあると考えられることからもこのことは支持されよう。実際、次の例のように、「定冠詞＋N」の中には「この＋N」でしか訳せないものが存在する。

(22) In his opinion, Afghanistan has historically suffered from the indifference of other countries, rather than their interference. If it had oil fields, it would have been an entirely different story. As it is, opium is the country's only export item.

彼［イランの映画監督モフセン・マフマルバフ氏］は、アフガニスタンは他国の干渉よりもむしろ無関心に苦しめられた、と考える。石油があれば話が違った。しかしこの（#その）国が世界に提供できる産物はアヘンだけだ。

（天声人語 2001.10.10　英訳は同日の International Herald Tribune/ The Asahi Shinbun）

この点については庵(1997b:ch.4)で少し議論しているが、本格的な対照研究は今後の研究課題である。

3－2－2．代行指示の場合

以上、指定指示について見てきた。次に、代行指示の場合を見てみよう。先に見たように、代行指示の場合、基本的に使われるのは「その」である。

(12)

	指定指示	代行指示	合計
この	326	128	454
その	174	512	686
合計	500	640	1140

$\chi 2=239.3$（自由度１）
(99.9%水準で有意)

こうした数値の違い以外にも、「この」による代行指示と「その」による代行指示の間には違いがある。次の表を見て頂きたい。

(23)

	異なり語数	延べ語数
この	13	128
その	213	512
合計	226	640

$\chi 2=24.87$（自由度１）
(99.9%水準で有意)

この表からわかるように、「この」の場合には結びつく語のバリエーションが限られている。今回のデータで現れたのは「間(4)、後(12)、うち(27)、関連(1)、期間(1)、ケース(1)、結果(13)、代金(1)、ため(55)、中(10)、背景(1)、負担(1)、製造中(1)」であった（(　)内は使われた回数）。一方、「その」のバリエーションは極めて多い。これは、同一節内では「この」による代行指示は不可能であるという制約によるところが多いと思われる。「この」と「その」の例を２つずつ挙げておく。

(24) モスクワで６月下旬に開かれた日露の識者による「日露フォーラム９９」では、ロシア側参加者から、悲観的な発言が続出した。外務省のカラーシン次官は「領土問題の解決はロシアの領土保全に害を与えるものでなく、世論の幅広い支持を得るものでなければならない」と厳しい枠をはめた。その後、政府首脳サイドから聞かれる反応も「（北方領土の日本返還は）絶対ない」（ステパーシン前首相）などと、厳しいものばかりだ。

この（ok その）背景には、年末の下院総選挙をめぐり、政争が激しくなっていることがある。ソ連崩壊後、国民の間でナショナリズムが高まり、領土を外国へ渡すような発言をすれば、たちまち袋だたきにあいかねない。（9.2）

(25) ＣＳ信託銀などＣＳグループ５社は、こうしたデリバティブ取引を繰り返していたことが「公益を害する行為」と認定され、金融監督庁から今年７月、免許取り消しを含む行政処分を受けた。この（ok その）うちＣＳ信託銀は、業務停止や新たな顧客の受け入れを禁止するなどの処分を受けていた。（9.2）

(26) 捕虜の少年の大半はコンゴ人と名乗る。ルワンダ人と答えれば現ルワンダ軍の敵、つまり９４年ルワンダ大虐殺の加害者かその（*この）関係者と見られてしまう。どんな災難が待っているかわからない。（2.23）

(27) 伊勢訪問の翌年、６０歳を迎えたピアノ氏は、建築家を目指す若い人々のために一冊の本を著した。日本語にも翻訳された「航海日誌」（ＴＯＴＯ出版）。その（ok この）中でピアノ氏は言っている。

「冒険家の魂を持つものは、逃げ場を求めず前進する。現代のロビンソン・クルーソーのように」（5.17）

(24)(25)のように「この」が使われている例では「その」も使用可能である。一方、(26)(27)のように「その」が使われている例の中には、(26)のように「この」に置き換えられない例も(27)のように「この」に置き換えられる例もある（前者の方が多い）。(27)で「この」が使えるのは「この本」が使える条件が満たされているためである。

このように、代行指示では基本的に「その」は常に使用可能であり、先行詞が文であったり、トピックとの関連性が高い名詞であったりする場合に「この」が使用可能になるこ

とがわかる。言い換えれば、この用法では「その」が無標であると言える[11]。

4．まとめ

本稿では「この」と「その」に関するこれまでの議論を踏まえて、新たに収集した定量的なデータを合わせて考察を加えた。その結果、指定指示の場合、「この」は固有名詞と結びつきやすく、先行詞を言い換えた形での照応がかなり見られることがわかった。これに対し、「その」は先行詞をそのままの形で受けるということが改めて確認された。このことは、「この」はトピックとの関連性をマークし、「その」はテキスト的意味の付与をマークするという論者のこれまでの主張を改めて裏付けるとともに、この用法では「この」の方が無標であるという主張の妥当性も示しているように思われる。

一方、代行指示においては、頻度（延べ語数）、表現のバリエーション（異なり語数）のいずれの点からも「その」が無標であると言える。

引用文献

庵　功雄(1993)「「この」と「その」の文脈指示用法の研究」1992年度大阪大学修士論文

――――(1994)「結束性の観点から見た文脈指示」『日本学報』13, 大阪大学

――――(1995a)「語彙的意味に基づく結束性について」『現代日本語研究』2, 大阪大学

――――(1995b)「コノとソノ」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）』くろしお出版

――――(1996a)「「それが」とテキストの構造」『阪大日本語研究』8, 大阪大学

――――(1996b)「指示と代用」『現代日本語研究』3, 大阪大学

――――(1997a)「「は」と「が」の選択に関わる一要因」『国語学』188

――――(1997b)「日本語のテキストの結束性の研究」未公刊博士論文, 大阪大学

――――(2002)「書評　白川博之「外国人のための実用日本語文法」」『一橋大学留学生センター紀要』5（本号）, 一橋大学

金水　敏(1999)「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6-4

金水　敏・田窪行則(1990)「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3, 講談社サイエンティフィック

――――――――――(1992)「日本語指示詞研究史から／へ」金水　敏・田窪行則編『日本語研究資料集　指示詞』ひつじ書房

三枝令子(1998)「文脈指示の「コ」と「ソ」の使い分け」『一橋大学留学生センター紀要』創

---

[11] 3－2－1の議論やデータなどから、指定指示の場合の無標の形式は「この」であると言えると思われるが、この主張は一般的には受け入れられにくいようである。

刊号，一橋大学
白川博之(2002)「外国人のための実用日本語文法」『月刊言語』31-4
田野村忠温(1990)『現代日本語の文法Ⅰ　「のだ」の意味と用法』和泉書院
堤　良一(1998)「文脈指示における「その／この」の言い換えについて」『日本語・日本文化研究』8，大阪外国語大学
Halliday, M.A.K. & Hasan, R.(1976) *Cohesion in English.* Longman